

2025.10
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

10号

第47巻
No.435



ワレモコウ *Sanguisorba officinalis* L. (バラ科 *Rosaceae*)

生 薬 チュ（地榆） 晩秋から早春に根茎部を掘取り、水洗し、ひげ根を取除いて陽乾する。

成 分 サ ポ ニ ン：sanguisorbin, sanguisorbigenin, ziyuglycoside I, II, pomolic acid、タンニン：sanguinin H-6、vitamin A 等。

効 能 収斂、止血薬として血痢、痔瘻、血崩、吐血、鼻出血、血便、咯血、月経過多、痔、腸炎に用いる。切り傷、火傷や湿疹、皮膚炎に外用する。清肺湯、槐角丸などの漢方処方にも配合される。



生薬 チュ（地榆）

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



北海道から九州までの日本列島、朝鮮半島、中国大陸、シベリアの日当たりのよい草地に生育する多年生の草本です。地下の根茎は太く木質で、ところどころ円柱状もしくは錘形に肥厚します。この根茎部を止血剤として使うことから属学名の*Sanguisorba*の名がつけられました。ラテン語のsanguis（血）とsorbere（吸収する）からなる合成語です。茎は直立して上部で分岐し、高さは60–100cmに達します。根出葉は奇数羽状複葉で、小葉は5–15個、細かい鋸歯があります。陶弘景（456–536）は「葉が榆（*Ulmus* L.）に似て長く、生えただけには地に匍い布くものだからかく名つけたのだ」と「地榆」の語源を述べています。『救荒本草』（1406）には「嫩葉を採り燥き熟し、水を用いて浸め苦味を去りて、水を換え掬淨し油塩に調え食す。茶無き時、葉を用いて飲に作る。甚だ熱を解す」と記され、若葉をゆでて水に浸し、苦味をとってから油炒めにするするとサッパリした味でおいしく食べることができます。

花期は8–10月。茎を伸ばし、細かく分枝したその枝先に円筒状の穂状花序ができ、暗紅紫色の花弁のない可憐な花を密につけます。花序の上部から咲き始め、次第に下に移って行く咲き方は同属のカイトソウ（*S.hakusanensis*）なども同じです。花びらがなく、昆虫を媒介して受粉を行う「虫媒花」から、風に頼った受粉を行う「風媒花」へ向かう進化の途中段階とされています。果実は花と同色の瘦果で、萼筒に包まれており、先端に暗紅紫色の4枚の萼片が残っています。

花序の上部から咲き始め、次第に下に移って行く咲き方は同属のカイトソウ（*S.hakusanensis*）なども同じです。花びらがなく、昆虫を媒介して受粉を行う「虫媒花」から、風に頼った受粉を行う「風媒花」へ向かう進化の途中段階とされています。果実は花と同色の瘦果で、萼筒に包まれており、先端に暗紅紫色の4枚の萼片が残っています。

以上是国内野生種の形態ですが、同じ学名の*S.officinalis*がつけられた「中国種」に関しての記載が古書にあります。『物類品鑑』（1763）には「漢種上品。享保（1716–1736）中種子を伝て、今官園に多し。葉大抵和産と同じして又別に小袴葉あり。和産は袴葉なし。根の状沙参（*Adenophora*）、防風（*Saposhnikovia divaricata*）のごとく直根にして軟なり。年を経たるもの旁根生ずといえども皆下に向う。和産の根横に出て紫黒色にして堅剛なるに異なり」と、根および根茎の形態や托葉の有無の違いがあり、品質も異なることが記されています。『本草綱目啓蒙』（1803）にも「舶来の者は直根なり。和産多くは横生して硬し。下品なり。……享保年中に渡りし唐種は根柔直にして防風根の如し。上品なり」と和産は下品で中国種は直根で上品であると記されています。これは小石川御薬園の「御薬草木取扱方書付」にも記録されています。この違いは現在の植物書『中国植物志』（1959–2006）にも「根茎は褐色又は紫褐色、丈夫、普通、紡錘形、まれに円柱形、断面は黄白色又は紫色。……茎葉は托葉が大きく、班卵形、草質、鋭鋸齒縁」と記され、在来種とは区別しています。

国内に自生することから『出雲風土記』（733）の「仁多郡」に「凡て、諸々の山野に在る所の草木は、…地榆…」と古名で呼んでいます。『本草和名』（918）には「地榆

和名阿也女多牟、一名衣比須禰」の和名、『倭名類聚抄』（931–938）にも「地榆 和名阿夜女太無、一云衣比須禰」と記されています。『延喜式』（927）には薬として「典藥寮 諸国年進雜藥」に「地榆、大和国16斤、美濃国20斤」など20カ国から137斤が献納されています。文学では『源氏物語』（平安中期）の「第四十二帖匂宮」に「老いを忘るる菊に、衰へゆく藤袴、ものげなきわれもかうなど」と見栄えのしない花として始めて「われもかう」の名が出てきます。

中国では薬としての歴史は古く、『神農本草経』（200–300頃）に「地榆、味は苦、微寒。山谷に生ず。婦人乳痼痛、七傷帶下病を治す。痛を止め、悪肉を除き、汗を止め、金創を療す」と多くの用途が記されています。（村上守一 記）